

チャプレンシー（21世紀への提言）

——同志社大学での基調講演を中心に——

今 泉 信 宏

序

21世紀に焦点を当てる前にまず20世紀を振り返る必要があると思う。21世紀でのチャプレンシーを問うのは至難の業。というのも欧米と違いたかだか百数十年のキリスト教史のなかでチャプレンシーを問わねばならないのとチャプレンシーそのものの位置づけも未だ定かではないからなのだ。又チャプレンシーが設置されている日本の大学も希少化、大衆化、差別化というプロセスの中で独自の建学の理念を問いつつも大衆化の波に吞まれ舵を失った船の如く日本海原を漂ってきた感を禁じ得ない。また建学の理念も形骸化しつつあることも否めない。ドイツやアメリカの政治、宗教事情が明らかに違っているのに欧米志向に偏ってきた日本のキリスト教主義大学も今日本の大学として生まれ変わる必然性が問われていると思う。つまりキリスト教が国教であったりまたそれが一般的に文化に定着しているのと重層信仰文化という土壌ではキリスト教大学の神学的自己理解やその果たすべく役割も欧米志向に偏っては見えてこないのではないか。

日本の平和憲法も今メイドインアメリカから脱却して日本人がつまり国民がオーナーシップ（市民権）をもてるものに変わらねばならない。キリスト教主義大学、神学部、神学校、教会も同様で欧米神学にドブプリ浸かり欧米方式の牧会展開や伝道に従事しているのであればそれを根本的に土台から見直す神学的作業が一つの大切なミッションではないだろうか。そこにもチャプレンシー

が果たす役割があるように思える。

多重宗教文化と共生ではなくむしろそれを敵対視してきた中でチャプレンシーも試行錯誤を繰り返してきた。他宗教との対話も試みてきたがやはりキリスト教に内在された優越主義を捨て切れず「共生」というスタンスは持ちえていない。アメリカの白人優越主義者達は実のところアフリカンアメリカンや他の少数民族が彼らにとって脅威という存在になってきたのでより一層の差別をもってこれらに対抗、抵抗してきた。日本でのキリスト教も21世紀では差別、抵抗、対立ではなく「共生の神学」を樹立する必要性に迫られている。

これがチャプレンシーと言われるものもない中で university pastor, campus minister, university minister, chaplain, 宗教主事、宗教主任、宗教部長、大学牧師等と名称は様々だが実際やってみると良く分からない部分が多くある。大学の教員なのか、職員なのか或いは自分の属する日本基督教団とか聖公会とか日本バプテスト連盟とかカトリックの diocese が派遣する牧師なのか、国籍（大学の）を持たない宣教師なのか、あるいは日本多重宗教文化社会という戦場での従軍牧師なのか、また最終的に神以外に誰に accountability（最終責任）があるのかその責任の所在もはっきりしない。学部付つまり学部の教員は学部長の元、大学の場合は学長、あるいは院長や学園長の元に来る。日本の官僚制を導入している大学では本来チャプレンの最終責任は余り問われず上司である学長や院長が責任をとるはずなのである。しかしながらキリスト教大学と雖もチャプレンシーということがよく理解されていない。厳密に言えば学長職や院長職を越えたところにチャプレンが位置づけられて当然なのである。チャプレンは究極的には神のみに従順でなくてはならない。神の權威がありその神の權威を人間的に取り扱うのがチャプレンではなかろうか。しかし大規模な大学（学生数と学部数）では各学部のチャプレン以外に中学、高校そして大学をまとめる宗教総主事が院長の直下にある。また大学の最高決議機関である大学評議会付チャプレンとして大学宗教主事がある。大学宗教主事は学長指名で、総主事は院長指名である。とすると双方共に地上のつまり大学という institution のボスの直下に置かれているのが大学主事でありまた総主事でも

ある。この主事達がどこまで神の権威に従順であるかが問われてくる。しかしそれは他の主事にも勿論あてはまるのである。神の権威と地上の権威をどう組み合わせるかが重要な課題となる。チャプレンに関しての一つの問題点はこの神の権威を私物化する危険性があるということなのである。チャプレンが時に或いは往々にして権威主義に陥るのはこの神の権威を笠に着るからなのだ。大学というまたチャプレンというシステムや権威に甘えていながらそれでいて自分が体制派であるのに反体制派だと思い込んでしまう始末の悪い存在がチャプレンでもある。人間関係の樹立もまずかったり、「自分の欲する善はこれをなさず、自分の欲せざる悪がこれをなす。」のもチャプレンである自覚を失わないようにしなければならない。

毎年4月になると今年はどうな学生が入学してくるのかと胸をおどらせて待ちわびる。特に前年度学生とうまくいかなかった時なんか新入生が待ちどろしい限りである。「鬼は外、福は内。」「いやな学生速くでていけ、俺の言うこと聞いてくれる学生早くこい。」

1960年代を体験した者にとっては現在の学生達は何か物足りない思いがする。とりわけ学生運動を起してくれと願っているわけではない。しかし無感動、無気力、無関心といわれてきた学生達とこういった事について話をしていると、「教授の多くも無気力、無感動また無関心である。」と返してくる学生もいる。私の教えている関西学院大学総合政策学部は今年で5年目になる。第一期生には覇気があり共に何か新しいものを造り上げていこうという連帯感もあった。何処でもそうであろうが一期生には先輩も後輩もいなく我々教員しかいなかった。従って学生にとっての遊び相手は我々であったのだ。一年目のクリスマス間近私は学生達に呼びかけて共に手造りのクリスマス音楽礼拝を計画した。もうすでに誕生していた室内合奏団を中心に急遽募ったクワイヤー20名、バナー（聖画垂れ幕）をゼミ生に作らせ、新聞にその広告を載せたところ三田市から大勢参加してきた。600人程でクリスマスを祝うことが出来た。また毎年2回フィリピンに Eco Habitat for Humanity（家造り）プロジェクト参加の為私は十数名の学生を連れて行くことにしている。ボランティアグループも沢

山できている。環境政策に深い関心を示し国際会議でボランティアとして働く者もいるし、また国連やアジア諸国にどんどん出かけていき日本とのつながりを真剣に考える学生もいる。帰ってくるとチャペルで体験談を話してもらう。こういう話をすると「今泉お前はチャブレンとして最高の仕事をしているじゃないか。」と言う人もいる。「不平や不満も無く毎日充実した生活ができるではないか。」確かにそうとも言える。しかし全ての学生がそうではない。現に二期生、三期生の中には一期生と変わらぬ情熱をもって学問の探求に、ボランティア活動にそして国際間の様々な問題に関心を示し取り組んでいる学生もいる。しかし大方は無気力、無感動、あるいは無関心な者もいる。時代が時代なのだからと半ばあきらめることも難しくはない。そしてキリスト教学の授業をしチャペルを運営し、教授会で祈りをささげ、各種委員会で与えられている仕事をしていけばいいのかもしれない。しかし60年代の学生のエネルギーやダイナミズムは持ちあわせていなくとも当時の学生になかったものを備えている現代の学生にどう関わっていけばいいのか、また多重宗教性のなかでキリスト教をはねつける学生達、しかし内側では傷ついている者も多いなかでチャブレンとしてどうあるべきかを考えさせられる。講義をきっちり聞き数ある課題も一通りこなし、前で発表させても一応のことはやる。するどい質問にも或程度応えられる。チャペルの出席率も他の学部を凌ぐ。しかし数のゲームをしていてもはじまらない。自分は本当にやるべき事をやっているのかどうか迷う時も多い。

私がいた60年代のアメリカでは大学生といえばラインホールド・ニーバーの『人間の本質と運命』を競って読んでいたものだ。しかし1970年代の後半私が教えていたカリフォルニア州の小さな大学の学生達はニーバーなんて聞いた事もないと言っていた。Secularization process（世俗化）は急ピッチで進行していった。アメリカの名門校であるハーバード、プリンストンやエール大学は全て教会立の大学であり元々牧師養成を教育の主眼としていた。1632年すでに牧師養成を教育の根幹としていたハーバードも今日では secular institution の旗頭であり世界中からトップブレインを集結している世界でも希な大学であ

る。ハーバード大学内にある Harvard Managing Company は株の売買や投資によってハーバードの年間予算の2-3割を捻出している。12000人の学生の内8000人が大学院生、学部生は4000人。これに対して教授陣3000人。日本の大学と比較もできない。しかしこのハーバードでも殆どの学生は良い暮らしを目指し、又世界で著名な存在になることを夢見てハーバードに殺到する。真理の探求、人生の目的或いは世の為貢献しようとする学生はほんの一握りとはやはり嘆いていたのは The Affluent Society で知られケネディ政権の元でインド大使を務めた John Kenneth Galbraith 教授であった。ハーバードから政界入りする学者も多い。ハーバード大ケネディ政治大学院で一つ面白いものを目にした。アメリカで新たに選出された国会議員（上院及び下院）は例外なくこの大学院で一週間研修をする。法案の作り方、lobby の仕方、陳情団への対応の仕方、予算の作り方、またその査定のやり方等を学ぶ。しかしそれにもまして重要なのは自分は一体何の為また誰の為に国会議員として選ばれたのかを考える機会が与えられたということなのだ。国会議員の務め、責任、また責任をとるということはへまをすれば辞任して事無きを得るということではなく、自分の犯した罪、過ちによる被害の決着をつける。それから辞任するなら辞任する。つまり人や国を治める事の意味、そして神の元にある国家の意味を考えさせる期間でもある。

日本には政治哲学がない、いやあっても希薄だ。私はこういった試みが国立大学で出来ないのであればキリスト教主義大学が協力し合っとういった試みをするのも大切ではないかなと考える。またキリスト教主義大学といっても教員や職員の何割がクリスチャンか、いやそれ以上に彼らの内どれぐらいの人達が基本理念を理解しているであろうか。教員もさながら職員の理念理解がネックになると思う。つまり大学の哲学が必要なのだ。大学特にキリスト教主義大学で教える、管理するまた働くということは他の職場と全く同じなのかどうか。こういった基本的な事柄を各大学において話し合うべきであろう。

また新任教職員のオリエンテーションも大事であると思われる。クリスチャン条項がある大学を含め少なくとも2-3日のオリエンテーション期間をとり

その大学の理念や歴史、問題点、また希望や期待について話し合う機会を持つ事も大切ではないだろうか。ここでチャブレンが責任をもちリーダーシップを発揮することにもなる。

1. チャブレンシー

21世紀でのチャブレンシーというとてもない題の元での話をとのことだが、ここでのキーワードは「21世紀」と「チャブレンシー」である。21世紀を語る事は予測或いは予知範疇でしか有り得ない。預言者でもなくまた未来学者でもない私が何を語れるか定かではない。しかし与えられた課題は我々の共有すべきまた共通の関心事であるだけに私自身の今までの経験、体験を踏まえてお話ししたい。しかし言うまでもなく一個人の経験や体験は相対的なものであるが故に同じ歴史のことがらを体験してもその体験の仕方は様々な形態をとりまた後に振り返ってその出来事を考えて見るに色々な解釈が成り立つ。社会的、政治的また心理的な環境に人間は多かれ少なかれ影響を受けるものだ。そしてそれが一つの出来事の体験にも感化を与え、後の解釈法にもインパクトを与える。

聖書の中の出来事、例えばよく引き合いに出される「ユダ」。「あのイエスを裏切ったユダ」という位置づけがなされ悪者扱いにされてきた。ユダの心理分析をすることも可能であろう。イエスへの一方ならぬ期待が裏切られた時点でイエスへの憧憬や尊敬の念が一種独特の憎悪に変形する。そしてその者を抹殺する事によってのみ自己自身の内にある正義への葛藤が癒される。ユダは本当はイエスを裏切ったのではなくイエスの足りないところを補充しようとしたとも考えられる。しかしここでは神の正義と人間の正義に対する考え方や理解の間にある違い或いはずれにユダは気がついていなかったのかもしれない。私はユダを institution の重要さに気付いていた男として考えてみた。

ユダは財布の紐を握っていた。今日で言うならば大学の財務部長、或いは理事長あたりであろうか。とにかく institution の運営を第一義的に考えていたわけであった。大学が institution であれば財政が非常に大切であることは言

うまでもない。特に私学の場合、親方日の丸と違い国公立に比べると少ない助成金しかまわってこない。

国旗、国歌が法制化されたがこれが私学にも波及してくることは明らかである。「強制、強要はしない」というもののキリスト教主義大学の各々の理念が国家主義と相容れない時ディートリッヒ・ボンヘッファーの如く「国家に忠実であろうとすればする程神に対して不忠実になる。」と言えるであろうか。そしてその結果にたいして責任をもつことができるであろうか。私学が日の丸掲揚や国歌斉唱を入学式や卒業式で否めば私学助成金が差し止めになったりカットされる可能性は十分考えられる。財政危機を迎えている私大が多いだけにどこまで理念を終始一貫して保って行けるか。先日私は自分のクラスで日の丸および君が代法制化について学生と議論をした結果全学大会にしようと考えたのだが大学院博士課程申請中という大学の事情を考えて思い止まったわけである。私は大学の一教員としてまたチャプレンとして「これはやらなくてはならない事」と思っているのだが、今のところは400名の学生と話し合っただけに止まっており具体的なアクションはおこしていない。

総合政策学部では「人間と人間との共生、人間と自然との共生」また“Think globally, act locally”のモットーと「仕えられる為ではなく、仕える為に」という聖句を学部の聖句としている。どれを考えてみてもこの国旗、国歌法制化は阻止すべきものと思うのである。総合政策学部にはアジア、特に中国、台湾及び韓国からの留学生が多く共に学んでいる。こういった学生達と話をするとやはり日の丸は軍国主義、アジア侵略の歴史、虐殺の思い出以外のなにもでもないことを再認識させられた。つまり21世紀を間近にしている今こそ新しい国旗、国歌が必要とされているのではないか。「君が代の代わりに民の代」としたところで根本的な考えを変えない限り大差はない。このような時こそキリスト教主義大学が先に述べたキリスト教の信仰理念に従い20世紀に犯した多大な人類へのそして具体的にはアジア諸国に対する罪を詫び、具体的な償いをするとともに、21世紀において二度とおなじ過ちを犯さないという深いコミットメントをなすべきだ。韓国と日本の間では韓日の歴史学者達が韓日の歴史を共同

で見直す作業が進行しつつある事はうれしいことである。

戦後日本の教会に対して「戦争責任」が問われているが、教会のみならず、日本のキリスト教主義大学に対しても同様の「戦争責任」が問われるべきであろう。この事と「日の丸、国歌法制化」と密接な関係があるし、またそれにより21世紀におけるキリスト教主義大学の位置づけ、責任の所在、そしてその歩むべき道が明らかにされるのではないだろうか。

私はチャプレンをまず神の前にある一人の弱き人間、しかしながら神から「人と人との共生」が完成されずとも近くなるよう働く責任を与えられている「存在」として捉えている。つまりエデンの園のケアを任された番人がチャプレンではないだろうか。チャプレンには預言者的要素も期待される。しかし預言者的存在と一口で雖も旧約での神の言葉を直々に民に伝えたあの預言者の深淵さを自分は持ち合わせていないと感じるチャプレンもいることであろう。またこれこそ神からの言葉と断言できる自信にも欠けているかもしれない。しかしエレミアの如く、何を言っているのかわからない時神が言うべき言葉を下さることを信じていくより他はないと考えている。ある事柄に命をかけるのであれば預言者的存在にはなれない。命をかけないでいいことに命をかけすぎている今日、真に命をかけるべきものは何なのか。高等教育機関で働く者（チャプレン）として何に生きがいを見出し、何に命をかけるのかを熟考しなければならない。

私自身大学で担当している研究演習（三四回生のゼミ）でアメリカにおける公民権運動を通してアメリカ社会の分析を試み、また四回生には日本とアメリカ社会構造の比較をさせている。マーティン・ルーサー・キング博士の書物を読ませその深い非暴力、無抵抗の思想に触れさせ社会のあるべき姿を模索させていくのである。キングも公民権運動を通して非暴力による社会変革に命をかけ、又それが命取りにもなったわけだ。キングはチャプレンとしての素質を備えていた人物であったし、また何に命をかけるべきか、そして命をかける意味を私に教えてくれた人であった。キング博士との出会いは私に一方ならぬインパクトを与えた。かの有名な“I have a dream”のスピーチの中で引用された預

言者イザヤの言葉が私自身の社会変革への夢であるし、またコミットメントでもある。“Every valley shall be exalted ; every mountain and hill shall be made low. Rough places shall be made straight. . . The glory of the Lord will be revealed and all flesh shall see it together.” 「もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、険しい所は平地となる。こうして主の栄光があらわれ人は皆ともにこれを見る。」

人種差別、隔離問題も20世紀を通じて（と言っても聖書の時代から尾をひいてはいるが）闘ってきた大きな問題であり、これに加えて飢餓、難民流出と民族紛争と民族浄化と言う問題も21世紀では更に激化することであろう。大学におけるチャプレンはこういった問題に継続的にまた組織的に取り組んでいかねばならない。

II. チャプレンは何にコミットすべきか。

キング博士が暗殺された時長女のバニースは4才であったが、今彼女はアトランタで弁護士として又バプテスト教会の牧師として働いている。最近出版されたバニースの著書に Hard Questions, Heart Answers（答えをさがして）というのがある。その中でバニースは次のような事を言っている。「私達の社会は使命感や目的意識を失ってしまった。そしてそれとともに、人生を生きるに値するものとしている基本的な事柄をも無視してしまっている。私達はどうでもいいようなありふれた事柄に心を奪われてしまい、人間的生のむずかしい現実には目を向けなくなっている。その結果、過剰で不適切な刑法制度を生み出してしまった。これは誰か個人を責めるというようなことではなく、私達の社会全体に対する告発でもある。もし私達が今日陥っている混沌状態を変えようとしているのであれば、私達自身と私達の制度を厳しく検証する必要があると堅く信じている。私達は自らに心をえぐるような問いを発ししなければならない。」（下線部筆者）

チャプレンとしてこの「自らに心をえぐるような問い」とは一体どんな「問

1 バニース・キング「答えをさがして」梶原寿訳、新教出版社、1998年。P. 45。

い」なのか。どうでもいいような問いかけばかりしてきたのではないかと私はパニスから挑戦を受けた気がする。私自身自ら心をえぐられるような問いとは今世紀最大といわれてきた「飢餓」の問題であるのだと思う。アフリカ大陸やアジア諸国を歩き回って感じた事は、飢餓という言葉は豊かな北に住んでいる我々には耳慣れた「言葉」でしかなくなっているという現実に関心をえぐられるということだ。豊かな北では飢餓という言葉聞いても無気力、無感動、無関心のみ示すのではないだろうか。教会では毎月聖餐式が行われている事であろう。

ここに供えるパンと葡萄酒は²

大地のめぐみ

労働のみのり

そして人々は感謝を口にし、やがて主の祈りを祈る。

天にましますわれらの父よ…

しかし一体誰の父なのか、また天にまします「天」とは歴史的に限定された時間や空間ではなく Sitz-im-Leben としてとらえるべきだ。国籍、民族、血筋、血統、血縁、地縁、出身地、出身校、文化、背景、ボーダーの違いや主義主張、思想、宗教あるいは無国籍こういったことを越えて、違いのない、またすべての者をわが兄弟姉妹と呼べなければ主の祈りや聖餐は空しいと言わねばならない。今まで会った事のないまたこれからも多分会うことのないであろう我々の兄弟姉妹が搾取され額に汗して作り上げた。そして、それを決して自分の口にする事が出来ない大地の恵みを我々は当たり前のように口にする。金さえ出せば何でも買える豊かな北が金力、経済力、政治力、及び軍勢力また科学技術力でもって正常値よりも安く借り取り搾取し現地の人々の生の為に最低限必要とされる耕地まで取り上げ世界中にアグリビジネス（多国籍企業）ネットワークを拡大させているのだ。大手スーパーやデパートの地下食品売り場には世界中からの食品が所狭しとならべられている。バナナ、パイナップル、小麦、コーヒーや紅茶など枚挙にいとまがない。私は年に2回学生を連れて Eco

2 犬養道子「人間の大地」中央公論社、1983。PP. 211-215参照

Habitat for Humanity プロジェクトに参加する為フィリッピンに行く。私にとっては巡礼の如きものなのだ。決してフィリッピンの貧しい人達の為に奉仕をするという傲慢な気持ちから参加するのではない。教えるよりは教えられる方が遙かに多い。与えるより受くるほうが何倍にもなる。貧しい心が豊かにされて皆帰ってくる。一年間豊かな北でのうのうと暮らしてきた、また世の搾取の構図に浸ったまま暮らしているこの自分。フィリッピンのエコハビタット村では皆共通に貧しい。しかしそこには共生の原理が働いている。そして互いが互いを労っている。家族の絆も強く家庭も温かい。10日間のきつい労働、しかし働ける喜び、家庭の温もり、また人を心から信じ自分を託す多くの子供達との共同生活を体験し、満喫して学生も自分も変えられて帰ってくる。一種の回心を体験するわけだ。共に労働し、また戦争から現在に至る迄の歴史的経過、これからの人と人、国と国との在り方について語り合う。そこに相互理解と赦しが生まれ、連帯感と共生ということが現実の可能性として迫ってくる。私は一年間の懺悔と悔恨と赦しを乞うためにフィリッピンへ行く。

旧約の中で神は大地を耕せと命じられた。「大地」、「人間」、と「謙虚」は語源を同じくしている。³ ラテン語の大地は Humus でここから human, humanism が生じた。更に最も human らしい、human を human たらしめる心的態度としての humility という言葉が生じた。日本語の謙虚さというのは「自分が出来するのに出来ない振りをする」意味で時として使用される。「私にそんな事が出来るはずがありません。」などとよく言う。またそう言わなければ高慢だと見なされる。humility とは自分のなかに有る、神から与えられたタラント（能力と価値）を他と同様素直に認める事を意味する。そしてそのタラントを己の為のみならず他のため用いようとする。しかしどんなタラントであれ一人のタラントには限界がある。その限界を認識し、まただからこそ連帯的に他と共生していく必要性を認識しそれを行動に移していくことが謙遜の意味でなくてはならない。どうもこのことがチャブレンに求められている感を持つ。一人だけでは限界だらけの人間。だからこそ互いに助け合い、支えあっていかねば共生

3 犬養道子「人間の大地」PP. 217-220。参照

はできないのだ。往々にして大学でのクリスチャン的存在は助けどころか癌になる場合が多いのではないか。クリスチャンよりも（と言ってもクリスチャンの定義も曖昧模糊としている）ノンクリスチャンの方がよく色々協力もしてくれるし、度量や心も広い。クリスチャンの多くはそれぞれの神学的、あるいは教会学的スタンスに固執し排他的になりやすく、他を疎外してしまう。そしてそれに気付かずにいる。そしてこれは人事ではなくチャプレンにもあてはまる。クリスチャン的存在とは being ではなく becoming であるべきだ。つまり一定の場に絶えず同じ状態に止まることなく様々なニードに応えながら成長していなければならない。真理は一つ、しかしその表現の仕方、その解釈は色々ある。決して一つではない。その一つに固執する時 human は human を裏切り human でなくなる。つまり己のスタンスを絶対視し至上、至高のものと考えまたそのように生きようとする時 human は no longer human となる。人間という限界領域を出て絶対という神の領域を犯すことになるからなのだ。

今世紀はバベルの塔の世紀であったと言える。human technology, 科学技術を絶対視した結果、環境破壊、核汚染、非核散、核処理になすべき術が見つからない。また思想的にも共産主義を絶対敵視してきた資本主義体制も共産主義同様崩壊し始めている。

人と人とが共生できないのは、前述の如く互いに己のスタンスに固執しそれを絶対視する所から生じる。かといって全てを相対化すればいいと言うことでもない。己の信念、信仰は言うまでもなく非常に重要な事柄であるし、真理も一つである。しかし真理の求め方はそれぞれの歴史的発展経過の中で異なっているしその表現法も多様化している。聖書の真理を信じるということは一つの見方に固執しそれを絶対化することではない。

20世紀において神学も様々な形態を取り、発展してきたが、神学が世の救いにより貢献できなかったのは、やはり神学が絶対視されてきたからではないかと思う。神学が聖書と言わば同列に配置されてきた。解放の神学により囚われ人が真に解放され、自由の身になり得たのだろうか。解放の神学は何故「貧しい南」より「豊かな北」で取り上げられたのであろうか。それは豊かな北では

貧しい南よりももっとも己の良き生活を守らんが為に保守化し、いつそれが脅かされるかも知らないのでいつもびくつき、心的にもがんじがらめになっているからであろう。こういった状態の中でチャブレンはどうあるべきなのか。まず己自身が囚われの身であるという深い認識を新たにしなければ、囚われの身の者の解放の手助けどころではない。まず己の身が解放されねばならない。これがチャブレンのコミットすべきことであろう。

III. 大学という institution

日本の社会に目を向けて見ると、この世紀は明治オリガーキーから受け継いだ天皇制、軍国主義の台頭、世界大戦そして戦後の復興、及び経済成長、内需拡大、バブルの崩壊そして経済システムの破綻が交錯してきた世紀であった。官僚支配型政治と社会そしてそこから派生する滅私奉公型企業体制、そしてそのおとしごであった終身雇用制、年功序列制にもひびが入り出した。もう完全崩壊したところもある。

経済成長と共に大学も成長してきた。ある大学はマンモスと呼ばれ高等教育機関よりは企業そのものになり、営利の追求が本分となっている。「私の大学は大丈夫だ」と誰が言えようか。また「私の大学はキリスト教主義大学だからまだ大丈夫」と言える大学があるだろうか。理念よりも利潤、内実よりも外側の魅力での学生集め、教育よりも経営が大学の基本的姿勢となっている。これは多くの大学が直面している問題でもあろう。

いわゆるキリスト教主義と言われる大学においてクリスチャンコードを守っている大学とそれをはずしている大学がある。また院長や学長にはクリスチャンコードが適応される大学もある。院長や学長がクリスチャンだからということでのそ大学の基本的理念が守られるということには必ずしもならない。現にそうでない大学もあることも現実である。「キリスト教主義」という考え方自体形骸化してしまっているのではないか。「院長や学長をクリスチャンにやらせておけばいい。」という考え方が案外はびこっていると思う。しかし理事長、院長、学長あるいは教員のクリスチャン性を問うことも大切なれどそれ以上に重

要なのは官僚支配型の機構のなかでキリスト教またキリスト教主義大学がどのように理解され大学が運営されているかである。先ほどキリスト教主義の形骸化と述べたが、一体何をもって大学はキリスト教主義と言えるのであろうか。一般的にはキリスト教学や概論が必修科目として位置づけられている。また週3回から5回チャペルが守られている。春と秋の宗教教育週間、伝道礼拝、教授会を祈りで始める、クリスマスやイースター礼拝など。行事としてはなかなか充実している所も多いようだ。しかしそれ以上に大学の経営、運営と教学にキリストの教えである「仕えられる為ではなく仕える為に」という理念が或程度生かされているかが決め手になる。自分は誰の為、また何の為にここで働き、教えているのか。これが意識化されると違いが出てくると思う。また意識化させる術も考えねばならない。

周知の如く毎年年度末を待たずして各省庁は次年度の予算請求を大蔵省に提出する。勿論「前例」が物を言うことになるが、大蔵省が予算配分の実権を握っているだけに各省庁は大蔵省に対して猛烈な働きかけをする。大蔵省の査定が各省庁の仕事を通じていかにすれば国民に最大還元できるかという考えに根差していればいいのだが…。

大学でも教育の中身を問いながら財務が予算査定、配分をしていると信じていたのだが、予算で削られるのは宗教関係の予算である事が多いのではないか。私は自分の教え子が将来他の大学で学びまた教えそれから母校へ戻ってくる事を願うが、教員もさながら教育とキリスト教主義の理念をよく理解している教え子がスタッフとして働いてくれることを願っている。

私は授業を通してあるいはゼミでまたクラブ活動の場あるいは研究室や家に遊びに来る学生達に「今まで与えられ又ノーマルとされてきたフレームに満足することなくまずそれを疑うことから始めるように」と話す。既成の思考法や発想法ではなく視点を変えて同じ事を見直してみる。既成価値でも見方を変えれば違ったものが見えてくる。また別のものも見える可能性が出てくる。今の時代に求められている事はどうすれば自分が成功するかではなく、どうすれば他と共生が可能になるかを模索していくことではないだろうか。それを少し

でも具現化できれば人生での成功ではないかと学生に話す。学生がこういった考え方や視点を持つきっかけを作るのもチャプレンの責任ではないだろうか。

大学という機構や機関には institution としての教会同様 diabolic power か principality and power（魔的力）にたいする魅力や執着心が働く。権力への執着心と言ったほうが分かりやすい。大学でも institution である限り人間的臭さや権力への欲望があるし、またあって当然である。チャプレンから院長や学長になる人もいる。それはそれでいい。しかし先程述べた humility を失ってしまうと只の権力者になってしまう恐れがある。humility とは己の限界を認識し、又己は何の為にこの職についているのか、またその職を通じて何を誰の為にしようとしているのか、自分がしようとしている事が institution にどんなインパクトを与えるであろうかをよく考え、保身の為行動をするのではなく神に自分を捧げる覚悟がなければならない。どんな人間でも権力を欲しがるとし、また権力には弱い存在なのである。この認識を深めねばなるまい。従って権力を欲するのはいい。ただそれをどう行使するかが問題である。

また人間は長期にわたって権力の座にいと権力に麻痺してしまい、新たな改革や取り組みをしなくなりもっぱら保身にまわる。院長、学長、学部長、宗教部長、宗教総主事、またチャプレン、クリスチャン教職員、理事長や財務部長、こういった職制はみな権力構造の一部である認識が欠けているのではないか。宗教や神を盾にとる事は十分可能であるが故に我々にはそれに対する認識を深める必要があるのだ。

IV. 21世紀をみつめて

Chaplain や chapel の語源はラテン語の capella である。これは中世の僧侶が身につけていた衣類を意味する。Chapel は聖なる遺骨や遺物が納められていた場所のことであった。後にプライベートつまり王や貴族の為の祈りの場や礼拝の場所として使用されるようになったのである。そしてこの遺骨や遺物の caretaker、管理人もしくは保管者が cappellani つまり chaplain の仕事であった。となると cappellani-chaplain は過去の遺物つまり今日ではあまり使

い物にならないものを後生大事に守り抜こうとしているのではないだろうか。検証されていない伝統主義、対象が明確でない神学、institutionalism（機関の運営を至上のものとする）、また形式主義と前例尊重等。チャプレンとして命をかけるべきものの再検討が必要であろう。

今日アメリカには国会議事堂や上院、下院議員会館内にチャペルもありまたチャプレンも配属されているのであるが、これには元々cappellaが城や要塞、大使館等に礼拝の場として使用された経緯があるのである。そしてcappellaniは王や貴族のお抱え用人として仕えた。従って権力者に仕えるのと神に仕えるバランスがcappellaniの一大課題ではないであろうか。cappellaniは中世王、貴族また金権力のあるプライベート家族のいわば「所有物」であった。今日学内の権力者の言うがまま動くcappellaniはもうこの時代に出来上がっていたのである。

前述の如く大学というinstitutionにも魔的権力構造がある。そしてcappellaniも権力者の「甘い」言葉につられることも往々にしてあるのではないか。cappellaniは決してパペットに成り下がってはならない。どんな甘い言葉を聞かされようともどんな約束事をささやかれようとも、神の言葉を甘くしたり又水増ししてはならない。

大学というinstitutionは時として火山の如く爆発することがある。学生運動という火山内の不平分子、不満が一気に吹き出した時もあった。また学内政治により大学が派閥化する時もある。こういった時cappellaniはどうあるべきか。体制派につくのか、反体制に徹するのか。いずれにせよ問題はcappellaniが最終的に何に誰に忠実であるのかであろう。神へのコミットメントなしにはcappellaniは空しい。cappellaniは伝統つまり遺物を守るcaretakerではないのである。聖なる遺物を今の時代に適応させる責任を担っている。又大学内の多種多様性が受容されるように働くことも要求される。日本社会そして大学というコミュニテイは多様性の大切さを認めながらも実は同質性あるいは良くて均質性を好む。私は自分の教えている関西学院大学総合政策学部をアメリカ合衆国と呼んでいる。「移民」で出来た学部、つまり専任教員の95%以上外

部から採用された。またその40%は外国籍の教員である。日本社会また大学内での「内と外」の区別を克服して行こうとする試みがなされている。

これから大学という institution の中で異質性をどう受容し又それを生かしていくかが大きな課題であろう。cappellani はこの同質性や均質性から異質性へと移行していく過程での橋渡し役という任を負わされているのではないだろうか。

20世紀において我々は封建主義から天皇制へ移行して行った。軍国主義の台頭からの世界大戦、アジアへの侵略、民族浄化、飢餓、難民、核汚染、環境破壊、バイオ・テクノロジー、生命倫理、クローン人間、遺伝子組み替え、そして最近のドミノ生体肝移植、共産主義対資本主義から来る東西冷戦という構図から南北落差、第三諸国での人口爆発、高齢化と少子化、金融、経済界の大変動と変遷を体験してきた。

果たして21世紀は20世紀よりましな Century に成るのであるだろうか。余り希望的観測は持てないと思う。しかし自分は fatalist ではない。神の摂理を信じて生きている。しかし神を信じると告白した者が多いにしては20世紀はなんとむごい世紀であったことか。神は全てを人間自身の責任として人間に任せ静観し沈黙を保ってきた。遠藤周作が言う如く、この沈黙の中にこそ神からの答えが秘められているのであろうか。

大学もエリート志向から大衆化へと進み、教育とは何かを問うことさえ少なくなってきた今日、キリスト教主義大学の果たすべく役割と責任は非常に重い。詰め込み教育システムから生じた断片的知識は豊富にもっている学生達に、真の教育とは各人の素質と神から与えられた誰も犯す事の出来ない賜物とを導き出し、それを育てていくことの大切さを、また人生での目的と意味を問わしながら学問を追求させていくことを教えていかなければならない。

21世紀の cappellani のイメージは—Be wise as a serpent and be soft as a dove.—「蛇のように聡く、鳩の如く柔軟であれ」ではないかと思う。institution に呑まれてしまうことなく institution をリフォームしていけるような know-how を身につけ、妥協する所は妥協する、しかし己の信仰に従ってそれ

をする。しかしながらこれには命をかけるべきであると判断し、決断した時は迷わずそれを貫く。そしてそれが可能に成る為には同志を育成していかねばならない。学生をそのように育て又同僚と良き人間関係を樹立していく事が求められる。cappellani がリーダーシップをとりながら我々全てがこの事に深い洞察をもつ必要性を説いていかねばならない。誰かに任せておけば何とかなるものではない。この自分自身から始めねばならないと思っている。

最後に一つのエピソードを紹介して終わりにしたい。あるアメリカの小さな町の教会に若い牧師が任命されて行った。教会員が出迎え、牧師に言った。「先生、こんな教会に派遣されて本当にお気の毒です。この教会は死んでいるのです。」「それは大変だ。ではまずお葬式をしましょう。」と牧師が言い、町の新聞に葬儀案内を出した。通夜を済ませ本葬儀の日いつも出てこない教会員まで葬儀に参列した。牧師は葬儀の最後に、教会員に「前に行って棺の中を見て最後の別れをするように」と言った。そこで一人一人前に行き棺の中を覗いてびっくり仰天したのである。そう棺の中には何もなく唯一つの小さな鏡が置かれてあった。そしてその鏡には一人一人の顔が映しだされていたのである。そこで牧師が言った。「教会の死は教会員一人一人の死でもある。又教会を生かすのも一人一人なのである。」

21世紀を間近かに控えた今日、キリスト教主義大学とそこで働く cappellani の役割と責任は我々全ての者の上にあることを覚え、また神がすばらしいチャレンジを私達に与えて下さったことに感謝しつつ、各々与えられている事に励んでいきたいと思うものである。